

宗教教団と他領域の接点を探る

六条円卓会議は、内外の有識者の知見を得つつ、浄土真宗本願寺派宗制に掲げられる「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」に、宗門がどのように貢献できるのかを具体的に模索するために設置され、毎年本会議を開催し、さまざまなテーマについて議論を深めていきます。

第11回六条円卓会議（2024（令和6）年3月11日）は、第12回宗門教学会議（2023（令和5）年12月20日開催、テーマ「公共空間における教団の役割」、「宗報」2024年5月号・6月号にて報告）の内容を受けて、「宗教教団と他領域の接点を探る」をテーマとして、オンラインにて開催いたしました。

本テーマは、国家・権力と宗教との関係が社会問題化する中、歴史や現状、未

来への展望も含めて宗教教団はどのように他領域（社会や個人）と接点をもちうるのか、社会の中でどのような役割をもちうるのか、そして教団そのものをどう論じていくのかの議論を深めるべく設定されました。

今回は、実践基礎神学、宣教学、公共圏におけるキリスト教の意義、教会論などを広く研究されている、上智大学教授の原敬子先生をお招きしてご発題いただき、キリスト教の教会が直面する課題や挑戦しようとしている試み（実践）について、その歴史と展開も含めて学がとともに、実際に教会で行われているグループワークを体験し、その内容をもとに討議を行いました。今号では、原先生の講義内容（前半）を報告いたします。

◆有識者発題 (前半)

今日のテーマである「宗教教団」という言葉は、「宗教」と「教団」という二つの言葉によって成り立っていますが、「宗教」「教団」「宗教教団」を簡単にくっつけていいものだろうかということを考えて、今日の時間を一緒に過ごしていきたいと思います。

実は、「カトリック」という言葉は「普遍」といわれるとおり、カトリック教会は「普遍だ」という主張をしつつこの2

000年の間、大変な分裂をして今の状態にあります。アメリカでは中絶の反対や賛成であるとか、女性を教団のリーダーシップとして認めるか否かなど、さまざまな対立が起きています。現在、13億人といわれているカトリックの集団は、油断するとすぐ分裂しかねない危機にあります。

その中で今日は、「シノドス」という一つのムーブメント、それがどういうはたらきをしているかということについてお話ししたいと思います。

一、自己への問い

さて、私の体という一つのリアリティーには、「所有」と「存在」という二つの認識の側面があります(次頁図参照)。

まず「所有」とは「私は体を持っている」ことです。「所有」のレベルでは、ある種「管理モード」ともいえます。健康診断を受けて、数値が上がったり下がったりするのに一喜一憂して、「これはちょっとあんまり食べすぎちゃいけない

原 敬子 (はら けいこ)



上智大学神学部教授。1965年生まれ。広島大学大学院修了(教育学)、Institut Catholique de Paris(パリ・カトリック大学)において神学修士号(STL)取得、上智大学大学院博士後期課程において実践基礎神学を研究し博士(神学)取得。現在、上智大学神学部神学科において実践基礎神学、宣教学、カテキズム、さらに、公共圏におけるキリスト教の意義、シノドスについての研究を継続している。著書に『キリスト者の証言…人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』(教文館、2017年)、共編著に『宗教信仰復興と現代社会』(島蘭進編、『時のしるし』を読む信仰の感覚―《日本の教会》の信仰復興)、国書刊行会、2022年)、編著に『「若者」と歩む教会の希望』(日本基督教団出版局、2019年)、『正義と平和の口づけ…日本カトリック神学の過去・現在・未来』(日本基督教団出版局、2020年)ほか多数。

いな」というのが管理モードです。これは、自分の体に対して、その自分の体を所有している責任者として、社会人として、最低限しなければならぬというものです。自分の周りや所属している共同体、皆さまにとってはお寺などとして理解している部分が結構あります。

次に「私はこの体そのものだ」という「存在」のレベルにいきますと、「管理モード」とはまた別の「物語モード」と

一つのミッションの二つの側面として…

私は体を持っている(所有) → 管理モード → 社会人としての役割

私は体そのものである(存在) → 物語モード → パーソナルな「私」

表現しましたが、私にしかわからない、私の歴史や私自身ということになってきます。私が発露するとか、誰にも侵されることはできない場所という空間。体はそのような意味も持っています。

結局、この体がミッション(宣教)を行うわけで、ミッションには二つの側面があります。このように私たちの体には「所有」と「存在」の側面があるということをまず意識しておきたいと思えます。

二、キリスト教のミッション(宣教)とは

紀元前500年頃は、ユダヤ教の世界です。そこでのイスラエル民族は、周りにペルシャなど大きな社会があり、小さな民族として存在する中、われわれの人生は自分たちの祝福のためではなく、他者のために召されたという自己理解がありました。ですからミッション(宣教)とは、「他者のためにわれわれは何らかの

生を受けて働く」という理解となります。

そのユダヤ教の中の一人の人間として生まれ、死んだイエスは、信仰を持たない人びとのところに行つて、彼が理解したユダヤ教の信仰を他者に向けて語り、そこで境界線を越えていきました。結局、キリスト教とはイエス・キリストという一人の人物が創設したわけで、イエス自身はキリスト教という教団には所属していません。

キリスト教のミッション(宣教)の歴史を3区分しますと、まず、『新約聖書』では、イエスの死後、弟子たちがどのようにイエスの言動を伝えていったかという話がかかれているので、紀元100年代ぐらいまでの話です。例えば「マルコの福音」は、イエスの死後30年後、「ヨハネの福音」は紀元90年の成立です。つまり自分たちがしていることをイエスの活動になぞらえて書いた書物なのです。イエスの弟子たちは、ローマ帝国の各地に向かって、さまざまな宗教文化を越えていきました。ですから結局、キリスト教の

神学というのは「イエス論」なんです。イエスは何も書き残していないので、後の弟子たちが、イエスの言葉を書き残した伝承ということになります。

次に、古代・中世・ルネサンス・大航海時代・植民地化と続きますが、16世紀頃、大航海時代を迎え、西洋で成立したキリスト教が、さまざまな国で植民地のようなかたちをとつていきます。この頃までは、国家と宗教が強く結び付いていました。そして、ルターの宗教改革において大きく分裂しました。この第2区分がほしい16〜19世紀です。

そして、近代になりますと、啓蒙主義ということになります。19世紀から国家と宗教が分離していきます（政教分離）。20世紀以降はそれがどんどん押し進められ、キリスト教内に多様性がある状態になっていきます。

ラテン語の「mittere」という言葉は「遣わす」という意味です。ですからミッシヨンの原意は、送る主体、つまり神がわれわれを送っている、他者に向かって

送っているということになります。さらに「mittere（遣わす）」から「mission（ミッシヨンの宣教）」となり、さらに「ミッシヨ・デイ」という言葉となって、20世紀になってからの第2バチカン公会議で、もはやミッシヨ（宣教）は、教会の一つの活動ではなく教会の存在そのものを表すようになりました。ここが「教会論」の大きな転換ということになります。

ミッシヨンの歴史の3区分の内実としては、キリスト教内で世界をどう認識するかという違いが出てきます。まず西洋のキリスト教時代は、教会が「世界はこういうものなのだ」という説明を担い、主体である人間一人ひとり、その世界観の中に入って、「世界はこういうものなのだ」と理解しました。だから世界が先で、認識が後になります。

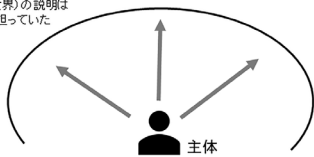
それが、啓蒙主義以降の科学至上時代は、自分の認識の方が先で、世界はいかようにも変容させることができる時代と なっています。人の考えで世界をいかようにもイノベート（革新）できるとい

ことになります。例えば、遺伝子やDNA。こういうものをわれわれは見たことがありませんが、科学的な実証性が優先しているわけです。そのような中で、宗教的認識というものを、どう考えてい

1 キリスト教ミッションを概観する

・ e) ミッションの特徴を「認識」のかたちから考える

客体(世界)の説明は
教会が担っていた



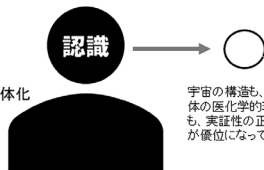
西洋のキリスト教時代

世界が先で、認識が後

神の創造した世界が先にある。世界は変化しない。
靴屋は靴屋。パン屋に生まれれば永遠にパン屋。

認識

主体の客体化



宇宙の構造も、身体
の医化学的理解も、
実証性の正しさが
優位になっていく

啓蒙主義以降→科学至上時代

認識が先で、世界が後

世界が先にあるのではない。認識が世界を創る。
人の考えで世界をいかようにもイノベートできる

ばいいのかとなるわけです。

三、「シノドス…ともに歩む」というムーブメント

カトリック教会は現在13億人といわれています。この13億人にとって、はたして同じ宗教なのでしょうか。もちろん仏教でも、「仏教」という言葉の中にさまざまな教派（宗派）があり、葛藤や協力など、いろいろあると思いますが、カトリック教会も同じです。

カトリック教会では、教皇パウロ6世が、今後は公会議の歩みを全教会の「シノドスの歩み」と位置付けました。1965年の第2バチカン公会議のときのこととて、そこからカトリック教会は新しくなったといわれています。しかし、やはり近代以前のものの考え方は引き継いでいたため、それをどうやって改革していくかということになりました。そこで、協議し意見する機関というものを設置したわけです。

「シノドス」という言葉は、「シン（一緒に行く）」と「ホドス（道）」という2つの言葉が合わさった新語として作られ、各地の代表者としての司教会議の名称にこの語があてられました。通常総会が2、3年に1回、年次総会のほか、特別総会というものもあります。

2015年、フランシスコ教皇は現代の教会を「シノドスの教会」だといいました。「一緒に行く」という意味で会議体をつくりましたが、単に代表者が集まって会議するだけではありません。教会全体が「一緒に行く」、「横並びで一緒に歩んでいくのだ」という、ある種の民主化といってもいいかもしれません。そう定義して、2021年から2024年の4年間行われる第16回通常総会シノドスのテーマを「ともに歩む教会——交わり、参加、そして宣教」として準備したのです。

まず2021年に第1期「教区ステージ」が行われました。各地域の信徒が話し、意見書を国ごとに取りまとめまし

た。本当に全員参加で行われた改革でした。次に2022年、第2期「大陸ステージ」では、7つの大陸に分けて、第1期で集約されたものを大陸別会合にて討議しました。そして2023年、第3期はいよいよローマに集まり、各国代表の信徒も加わって、総勢約400名で現在討議すべき内容について考察していきました。

各ステージにて採用されている方法が「Conversation in the Spirit（霊における会話）」です。必ず小グループでのセッション（祈りと分かち合い）が行われ、全体の会合につなぐというやり方をしていきます。

以前のシノドスは、赤い帽子をかぶった司教、枢機卿、あるいは一部の有識者が全世界から集まり、役職も決まっていた。それが2023年10月のシノドスでは、円卓のテーブルに普段着で参加していました。すごく和気あいあいとした空気感で、司教、枢機卿、有識者に加え、司祭、各地域の信徒代表、女子修道会の修道女、若者が参加しました。昔の

シノドスは男性しか参加していませんでしたが、2023年のシノドスでは女性も含まれています。以前のシノドスは、ある種「所有（管理）モード」でしたが、2023年のシノドスでは、「存在（物語）モード」に変わっていったわけですね。

討議のためのテーマは多岐にわたっています。第1期（2021年）に出された「10の探究すべきテーマ」は、

「旅の同伴者である」

「聴くこと」

「声に出すこと」

「祝うこと」

「宣教における共同責任」

「教会と社会における対話」

「他のキリスト教諸派とともに」

「権威と参加」

「識別することと決断すること」

「シノダリティの中で自己形成をすること」

の10項目が出されました。これを、地方の教会で話し合ってください、語り合ってくださいという事です。一

つひとつの教会の神父さまによっては、

「じゃあ、これを話し合ってみよう」と

フレキシブルなお考えの方もいますし、

「こんなの話し合ったって、どうってこ

とないよ」という方もいますし、もうさ

まざまです。「聞く」ということについ

て話し合いをすると、「聞くって難しい

よね」と、だいたい最初は「難しいよ

ね」というところから始まります。こ

うって、どこからでも入れる話し合いの

テーマから語り合いが始まっていくわけ

です。2023年になりますと、丸テ

ブルで話し合っていく内容が、さらに深

化していききました。

皆さまのお寺でも、こういう話し合い

をしたときにどういう反応が出るかなと

置き換えて考えていただけたらいいかと

思います。例えば、

「ともに歩むとは、誰も置き去りに

せず、最も苦勞している人たちの側

にとどまることである」

というテーマについて、皆さまはどう考

えるでしょうか。「ともに歩む」という

のですが、誰とともに歩むのか。誰かを仲間はずれにしていないか。教会の中で独りぼっちになっている人はいないか。そういうことを一緒に考えていきましよう、ということが、教皇から発信されたのです。

先述の「10の探究すべきテーマ」は、宗教教団の中だけではなく、会社や家族、仲間内やサークルなどで、「会社における共同責任」「会社における対話」とも置き換えて使うことができます。ですから、宗教教団でやっていることが、そのまま公共の社会の中で使えるという、画期的なものであるとと私自身は思っております。

2024年1月に出た最新の文書では、「2021年から2024年の全過程は、旅を続けるためのひらめきの源泉となります」とあります。われわれが語り合っている、ここが泉なのだといっています。全ての人が呼びかけられ、違いと交わり、豊かさとして生きている。違いを感じたときに、違いをよきものとし

て感じるくらいまで分かち合っていること、
 しょうということ。違うということ
 は、葛藤を伴います。でも、それは素晴
 らしいことだとなるまで、この体験をし
 ましょうということ。何がわれわれ
 の宗教的根源なのか、宗教の泉なのかと
 いうことを、お互いに分かち合ってい
 る。こういう人びととの交わり、出会い
 というものを続けることを、さらに進め
 ていきたいということから発せられた宣
 言なのです。

四、グループワーク

「Conversation in the Spirit (霊における会話)」

では、シノドスで行われる対話はどの
 ように進められるのか。2023年7月
 に出された「Conversation in the Spirit
 (霊における会話)」の体験をしていただ
 きたいと思います。「Spirit」というのは、
 「S」が大文字となりますと、われわれ
 でいえば「聖霊」や「精神」のことも「the

Spirit」といいます。日本語では「霊に
 おける」としか訳すことができないので、
 「スピリットにおけるカンバセーション」
 と考えていただいたらいと思えます。
 シノドスの教会における識別のダイナミ
 ズムが、この会話を通して行われるとい
 うこととなります。

グループワークの方法は、次のような
 流れで行われます。

- ①「発言し、耳を傾ける」…まずは
 自分の意見を述べる
- ②「他者と超越存在のためにスペー
 スを開く」…①において他者の話
 に心動かされた点を述べる
- ③「ともに形づくる」…共通項、一
 致点、あるいは、相違点をも明ら
 かにする

最初に、個人が準備します。一つの丸
 テーブルに12人が座って、分かち合う
 テーマを沈黙のうちに準備する。

そして順番に一人4分ずつ自分の意見
 を話す。これが第1ターンということに

なります。

次に、休憩などを入れて、沈黙ののち、
 周りの方がたから聞いた話のうち、自分
 の心が動かされた点を話します。これが
 第2ターンで、やはり一人4分で述べて
 いきます。

今度は、これまでの話の中で何か共通
 するもの、あるいは相違点も含めて語り
 合っていきます。これも一人4分で述べ
 ます。第3ターンです。

金魚鉢（フィッシュボール）という、
 哲学カフェでよく使われている方法論で
 すが、中で話し合っている人の周りの人
 は、ただ聞くだけです。でも、これは一
 つのダイナミズムを生むといわれてお
 り、中で語り合っている人たちの話を、
 外にいる人は観察してよく聞いているわ
 けです。

まず聞く。聞いて、自分の中で心が動
 かされているところにも意識する。この
 動きも聞くということ。他者も聞
 き、自分の動きも聞くという作業になっ
 ていきます。一般的な概念と概念を戦わ

せる話し合いではないということをご理解いただけたでしょうか。

このようなターンを、1日1テーマやっけていくわけです。一人4分で、皆同じテーマに着いて、平等の時間でお話をする。しかも、自分の話にこだわらない。他者の話を聞いて、心を動かされたことを話す。こういう実践を、地方教会、国、大陸、世界とさまざまなレベルで積み重ねています。

* * *

参加者5名（A～E）と原先生（F）をまじえ、「自分の信じる伝統宗教の本質をいかにして他者と共有する（分かち合う）ことができるでしょうか？」をテーマにエクササイズを実践しました。

参加者の発言（要約）は次頁の図表の通りです。

* * *

* 次回は、有識者発題の後半と、全体討議について報告いたします。
なお、今回の有識者発題に関連する内容は、原敬子先生の論文「神学的実践と宗教リテラシーの間を感受する試み——輪講「諸宗教における自然と人間」を通して——」（『現代宗教2024』、（公財）国際宗教研究所、2024年1月発行）にも詳しく論じられています。併せてご参照ください。

総合研究所 現代教学・課題研究室

グループワーク（エクササイズ）のテーマ 「自分の信じる伝統宗教の本質をいかにして他者と共有する（分かち合う）ことができるでしょうか？」	
〈第1ターン〉 まず、自分の考えを述べる	
A	今年はどうな年か、今はどんな季節かということを考えながら、今日はこのことをしゃべりたいということが多く。基本的に押し付けです。自分の思いで語っている部分が多い。
B	普段考えないことをなるべく伝える。浄土真宗でいえば、一つは人間観というところで、親鸞聖人は「罪悪深重の凡夫」、煩惱に染まりきった人間なんだという、人間の本質を見ていかれたということがある。それを初めて聞いたときに、すっときた。そこが大きかった。
C	日常生活や、地域に根付いた風習・文化に興味があるので、仏教に根差す文化・風習を見つけてお伝えしたいと思っている。この話は面白いというものを、他の人と共有したい。
D	まずは本質の部分だけ見極めるというような作業が先にある。専門用語を介さずに、自分の中でどう受け止めるのかを突き詰めて考える。それを同じ現代を生活しているその人と通じる言葉で伝えようとする。
E	にじみ出るといふか、態度でいろんなものが伝わってしまう。この教えが今もあなたのところに行っていますと聞い込んでいくのではなく、開かれていて、誰にでも、あなたにも届いていますというふう伝える。
F	自分の人柄が伝わるとあって、私自身をありのまま見せるようにしている。迎合するというわけではないが、ありのままの自分。そこしかない。
〈第2ターン〉 自分が今、心を動かされたこと	
A	言葉で伝えようとするが、そればかりではなく、態度などそれ以外のところが、他者に分かち合うときには大きなファクターになっているのではないかなと感じた。
B	「伝わってしまうものがある」「にじみ出るものがある」ということに共感した。「押し付けてしゃべっている」という感覚もちゃんと持って話さないといけないと思った。
C	「ありのままを見せる」というのは、非常に重く受け止めている。私自身が、ありのままにどう受け取っているのか、その言葉をどう生活に活かしているのかを、態度や言葉で表していくことをしないと、他の人に共有がなかなかされにくいかなと感じた。
D	皆さんが言っていることとちょっとずれているなと思った。皆さんは濃淡があったにせよ、自分が信じることをそのまま伝えることを言っていたが、確かに聞いた人が一番覚えているのは、そこだろうという気もした。
E	いつもとちょっと違うこと、興味を引きそうなことを言ったら、こっちを向いて話を聞いてくれたりする。そうしつつ、話をしていくのが大事。
F	「煩惱」という言葉が出てきて、心を動かされた。本質を見極めるというのも、すごく考えさせられた。一般の宗教を持っていない人は、人間の世界の話ではないんでしょうと考えるので、煩惱という話を聞いたときに、今ちょっと言葉にならない私自身の心の動きがある。
〈第3ターン〉 一致している点は何だったか	
A	誰に語るか、この人にこれを伝えなければいけないということを想定して考えているところ。
B	自分の伝えたいことを伝えるというのは、やはり根底にある。
C	伝統宗教の本質を自分の中でどう消化していくかということが第一義としてある。
D	他者を想定するとか、顔の見える方を意識しているかというのは、全員実践者ならではというか、本当に伝えることを常に考えている。
E	自分なりに理解したところ、相手が話を聞き入れやすいところを探っている。でも、自分の伝えたいことを伝えたいということもある。
F	この空間の中に、じっくりくる、腑に落ちる、そこを目指そうとしているんだなと気付いた。実践者という共通項はびんときた。その実践の中で、苦心している。そういうところ。